

01・よわよわ結月につよくてニューえっちゲーム

〈シチュエーション〉

前日譚トラック01から数日後。

結月とのデート当日、三月三十日（土）十二時過ぎ。

とある病院の一室。

結論から言うと、デート当日、主人公は様々な事情から待ち合わせ時刻に間に合わなかった。

その上、ようやく到着した時には結月は待ち合わせ場所で倒れており、そのまま搬送された末に、とある『病』にかかっていると診断された。

そこで主人公はその治療法を理解した上で、協力を申し出る。

そんな主人公が『ナビゲート役』を名乗る謎のAI『ルナ』から最後の説明を受け、治療を始めるというシチュエーション。

結月の登場はなし。すべてルナのセリフのみ。

場所移動はなし。主人公が室内を移動するのみ。

結月の一人称は『私（わたし）』で二人称は『貴方』。

ルナの一人称は『私（わたくし）』で二人称は『貴方様』。

SE1 病室の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【トラック終了まで流し続ける】

【0—5秒ほど流してSE2】

SE2 心電図の音

【フェードインするように聞こえ始める】

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【トラック終了まで流し続ける】

【0—10秒ほど流して『ルナ』のセリフ】

【その後、音量を小さくして流し続ける】

★ボイス加工あり

・『ルナ』のセリフはすべて、少しだけ『機械・ロボットっぽい』イメージにするため『通話風の加工』を入れる

〈ルナ〉

● 正面 30センチ

■ 主人公の正面の位置にあるモニターから話しかける。

『自分が結月の治療をする』と言い出した主人公に対して、ゆるやかに反対している。ルナはこれまで、治療に関するリスクを丁寧に説明する事で、主人公を諦めさせようとしてきた。

まさか主人公が『やる』と言い出すとは思っていなかったからだ。

どうもその説得は徒労に終わりそうだが、まだあきらめきれない。

ルナは、病院の機器が結月の脳のとある部分と接続した事で現れた存在だ。

また、この機器を通じて会話可能になった『香椎結月の精神状態、ひいては今回の病に関するナビゲーター』である。

つまり、厳密には『機器が結月の人格の一部と、結月の理想とする女性像を読み取り、結月つぼくふるまうAIを生成した』存在なのである。

しかしルナは、主人公にはこれを伏せ『ただの治療用AI』と名乗っている。

ルナは結月の『知的で落ち着いた側面』であり、結月の考えた『主人公と円滑なコミュニケーションが取れる理想の女性』……から作られたAIだ。

容姿は二十五歳程度、精神年齢は二十代後半程度をイメージして作っている。

だが、結月との関係はあまりよくない。

昔の自分を見ているようでイライラし、つい結月にはとげとげしくなってしまうのである。

そのため結月のメイン人格が『主人公に治療してほしい。自分がこうなってしまった責任を、主人公にとって欲しい』と願っている事に対し『主人公は自分ともう関わるべきではない。主人公にもう迷惑をかけたくない』と内心反対している。

また、ルナは主人公に対して、かすかな怒りがあるのも事実である。
ただのAIなのに、複雑な心を持ってしまったのだ。

『なぜ約束にあんなにも遅刻したのか。また、その理由をなぜ説明しないのか。スマートフォンがあるのだから、せめて一言連絡できなかったのか』と内心思っているのである
「『『明るめの声だが淡々とした、お姉さん系AI』の演技をしている。

カーナビのAIのようなイメージ。

しかし、実際のルナはAIではなく『感情に振り回されがちな弱い少女・香椎結月』の、比較的冷静な一面でしかない。

そのため、感情がにじみ出てしまう。

なので、心配そうに。『AIを装いつつも、本心では反対している』というのが、どうしても出ている感じで――

では……。

最後にもう一度お伺いしますが、本当に宜しいのですか？」

〈主人公〉

「うん。早く始めよう。

こうなったのは私の責任だから」

主人公、広い病室の左半分側に立ち、ベッドに横たわる結月を暗澹たる表情で見下ろす。二人は今一枚のガラスに隔てられており、主人公はもちろん、彼女の両親さえ触れる事ができない。

結月がこんな事になってしまったのは、すべて自分のせいだ。

主人公はそんな思いを抱えながら、ここへ来ている。

〈ルナ〉

● 正面 30センチ

■ 『やはり止められないか』と思いつつ、主人公の気が変わってくれる事を期待して、先程もした説明を繰り返す

「【※息遣いのみ※】で表現する。
ため息をつく。

少し戸惑ったような、困ったような、含みのあるため息」

……。

【落ち着いて、淡々と。

『主人公が結月の治療をする義理はない』という事について、改めて説明していく』
既にご説明した通り、この度香椎 結月（かしい ゆづき）が罹患（りかん）した『病（やまい）』につきまして、貴方様に責任はございません。

結月には、以前からこの病（やまい）の兆候があった。
考えられる要因としましては、過度のストレス。

つまり『彼女が今の暮らしに不満を抱いているから』と仮定するのが自然でしょう。

【少し間をあけてから】

しかし、その『今』に、貴方様が含まれているとは断言しかねます。

……本日、三か月ぶりにお会いになるはずだったのですから。

【少し間をあけてから。

言いにくそうに、だが、はっきりと。

『主人公の気持ちは嬉しい。だが、治療を手伝ってもらう事はない』という感じで
……です。はつきりと申し上げます。

『結月が心配』という貴方様のお気持ちは、大変有難く頂戴しております。
ですが……だからと言って、貴方様が治療を申し出る義理や、義務はないのですよ」

〈主人公〉

「ううん。そんな大層な理由じゃない。

待ち合わせしてるんだ。だから、早く会いに行ってあげないと」

〈ルナ〉

● 正面 30センチ

■主人公のどこまでも面倒見がよく、義理堅い性格を好ましく思う。

それとともに、数時間前、遅刻した主人公が連絡をよこさなかった事をますます不思議に思い『もしかすると、何らかの理由があったのだろうか』と考えるようになる。

その一方で『結月のような人間に、そこまでしてあげる価値はない』とも思っている。ルナは自分自身……つまり結月の事が好きになれずにいるので

「【※息遣いのみ※】で表現する。

困ったように、複雑な思いで息をつく」

……。

【主人公の言葉を要約して復唱しつつ、説得を諦める。

『仕方ない人だ。そこまで言うのならしょうがない』という感じで」

『会う約束をしているから』と仰られますか。

たとえそれが仮想空間の中になったとしても、貴方様は約束をお守りになりたい。
……そうお考えなのですね。

■ きっぱりと気持ちを切り替える。

『主人公がそこまで言うのなら仕方ない。全力で手助けをしよう』と決意して。

『主人公のスマホで主人公の個人情報を読み取り、並行して生体情報を受け取る事で、自分と接続し、サポートする』という提案をする

【穏やかに、話を進める】

承知致しました。

それでは、スマートフォンをお預かり致します。

並行して、貴方様の生体情報（せいたいじょうほう）を読み取らせて下さいませ」

〈主人公〉

「……あー……」

だがここで、少々の問題が生じた。

実を言うと、主人公は今スマホを所持していない。

正確には、使える状況にないのだ。

今その経緯を説明するのは、少々骨が折れる。

また、言い訳じみてくるので、主人公としてはできるだけ話したくない。
なので歯切れの悪い返答をしていると、モニター上のルナが首を傾げた。

〈ルナ〉

● 正面 30センチ

「きょんとんとして。」

なぜ主人公が困っている様子なのか、理解しかねるので
うん？」

〈主人公〉

「ごめん、今スマホないんだよね。ないとまずいかな」

〈ルナ〉

● 正面 30センチ

「【素直に不思議そうに。】

主人公の言葉を『自分はスマートフォンをそもそも所持していない』と解釈したので。
冷静に振る舞いいつも『そんな事があるの？ 自宅に忘れた？』と思っている」
あら……。お持ちでない？」

主人公としては、できるだけ短い言葉で済ませて逃れたくてこう言ったのだが、その判断は誤りだったようだ。

目の前の治療用A Iは一見冷静に振る舞いつつも、困惑の色を隠せていない。

『現在に生きる若い女性が、スマートフォンを所持していない。果たして、そんな事があり得るのか』と考えているのだろう。

多少の補足は避けられないようだ。

〈主人公〉

「あー……。『持っていない』って意味じゃなくて。

さっきちょっと色々あって、壊しちゃったんだよね。

真ん中からばっくりいってるから、電源入らないの。

使い物にならないんだ」

SE 3 主人公がポケットからスマホを取り出す音

【最初から最後まで流す】

〈ルナ〉

●正面 30センチ

■主人公が取り出したスマホを見て、納得する。

主人公のスマホは先程の説明通り、破損している。

その壊れ方もひどい。真ん中から杖のようなもので踏みつけられたような丸い穴があいっており、その穴はケースを貫通して、液晶もすっかり砕けてしまっている。

つまり、誰が見ても『とても使える状態ではなさそう』と判断する状態なのである。

同時に、内心とてもホツとする。『主人公は、結月を裏切ったわけではなかったのだ』と思えたので

「『ああ、なるほど……こういう事か。であれば納得がいく』といった様子で」
……成程。

破損されてしまったのですね。

【詳細は聞かずに、話を進める。

本当は主人公のスマホがこうなっていたいきさつを知りたいところだが、主人公が自分から話したがるとは思えなかったので」

承知致しました。

それでは、大変恐れ入りますが、ID等に関しましては、手入力をお願い致します」

〈主人公〉

「ありがとう」

〈ルナ〉

● 正面 30センチ

■ ここから、主人公の行う『治療』とその具体的な内容、目的について、改めて説明する
「少し間をあけてから。」

真面目かつ『ナビゲーターAI』『アナウンサー』っぽい雰囲気に戻って」
では……最後に確認を。

私（わたくし）達の目的は『病（やまい）』の治療です。
その方法とは、これからご入室いただく仮想空間にて、結月の『病（やまい）』が何（な
ん）であるのかを空間内で本人の口から聞き取り。

その上で彼女の願望を読み取り、それらを全て成就させる事です。

これが果たされた時点で結月は覚醒し、貴方様も自動的に帰還できる事でしよう」

〈主人公〉

「わかった。……もし、失敗した場合はどうなる？」

〈ルナ〉

●正面 30センチ

「少し間をあけてから。

内心ためらいつつも、**淡々と事実を述べる**」

……もし、失敗に終わった場合。

その時は、制限時間後、貴方様は一人でお戻りになり、我々は結月の自然な覚醒を待つのみとなります。

タイムリミットは百二十分。

私（わたくし）達は、それまでに、目的を達成する必要があります」

〈主人公〉

「わかった。それまでに必ず戻る」

〈ルナ〉

●正面 30センチ

「それから……貴方様もご存じの通り、治療用の仮想空間内は、治療対象の主観によって構成されております。

貴方様もその影響を、大いに受けると予想されます」

〈主人公〉

「……どういう事？」

できる事なら、主人公は速やかに説明を受け、すぐにでも仮想空間に入りたかった。しかし、これは質問せざるを得ない。

ただでさえ仮想空間についてはあいまいでよくわからない点が多いというのに『治療対象の主観によって構成される』とはいったいどういう事なのか。

これを理解していなくては、まともな治療は困難に思えたからだ。

〈ルナ〉

●正面 30センチ

「少し考え込むようにした後、話し始める。

できるだけわかりやすいたとえ話をしてあげたいので」

具体的には、そうですね……。

空間内では、結月が貴方様に感じているイメージが、そのまま適応されるとでも言いましょうか。

たとえば結月が、貴方様の事を『とても力持ち』と知っているとします。

それが事実ならば、空間内ではそれが強調されるという仕組みです。

貴方様は、現実ではとても出せないような、凄まじい腕力を発揮できるでしょう。またこれは、結月や貴方様が実際には知りえない、未確認情報も対象となります。

例えば結月が、貴方様の事を『とても絵がうまそう』と思っていたら。

現実の貴方様は、絵を描く事が不得手でも。

あるいはそもそも絵を描いた事がなく『自分は絵がうまいかどうか』すら把握してなかったとしても。

空間内では、別人のような画力を手にする事ができるのです。

つまり、結月の印象と実態が一致していれば、それは非常に強く。

印象と実態が一致していない場合でも、それなり以上に……貴方様は強化されるという訳ですね」

〈主人公〉

「なるほどね。……でも、今のは、ポジティブな印象の話だね？

ネガティブな印象の場合はどうなる？」

〈ルナ〉

● 正面 30センチ

「はい。仰います通り、今のはポジティブな印象における例でございます。

ご指摘の通り、本来仮想空間内では、ネガティブな印象も強調されます。

しかし、結月の脳と接続している私（わたくし）の権限で、それらが無効化します。

【主人公の事は、治療担当者『様』と呼ぶが、結月の事は患者と呼んで、様をつけない。
ルナⅡ結月である事の伏線】

患者の脳に働きかけ、治療担当様が少しでも有利に治療を行えるように取り計らう。
それが私（わたくし）の役目だからです」

〈主人公〉

「つまり、私はあなたのおかげで、現実より強い状態で治療ができるって事だね」

〈ルナ〉

●正面 30センチ

「【少しにこやかな声になって。】

察しの良い主人公と話していると、話がスムーズで助かるので」
然様（さよう）でございます。

私（わたくし）が、ここから貴方様をお守りいたします。

【なるべくわかりやすいたとえで話してあげたい。
なので、砕けた例を出す】

そうですね……いわば私（わたくし）は、仮想空間に入る際のデメリットを打ち消し、コンピューターゲームで言う所の『つよくてニューゲーム』に似た状態を可能にする存在とでもいいでしょうか。

【少し自嘲気味に、『自分に呆れている』という感じで。

ルナは結月から生まれた存在でありながら、彼女を完全にコントロールする事が出来ないの』

どこが『つよく』なるのか、指定も、予想もできないのが難点ではございますが。

【気を取り直して。話を戻す】

……つまり、仮想空間内は、全て結月の都合のいいように歪曲（わいきよく）されており、そこで何が起きるかは私（わたくし）にも見当がつかないという事です。

そこでは決して結月を止める事はできず、全てが彼女の意のまま。

おまけにそれを、結月自身も自覚していない。

【穏やかに、だが少し凄味がある感じで。

主人公の覚悟の度合いを確認したので】

……何が起きるかわかりませんよ」

〈主人公〉

「うん。それは承知の上。覚悟はできてるよ」

〈ルナ〉

●正面 30センチ

「少しにこやかな声になって。

『そうだ、主人公はそういう人だった』と思って、それが誇らしいので」
承知致しました。

■いよいよ治療を開始するために、会話を切り上げる。

それから主人公に、治療の準備に入ってもらおうよう促す
それでは、危険な旅になりますか……。

成功を心よりお祈りしております。

【そちらⅡ治療用の、仮想空間と接続するための椅子】

そちらへおかけになって……目を閉じてになって下さい」

〈主人公〉

「……わかった」

SE 4 主人公の足音

【最初から最後まで流す】

SE5 主人公が治療用のいすに腰掛ける音
【最初から最後まで流す】

★ボイス加工あり

・2メートルほど離れた距離にする
ヘルナ

●正面 30センチ

「それでは……接続を開始します。
貴方様のご協力に、感謝致します」

ここでフェードアウトして終了。